

## 研究ノート

## 「三つの願い」質問はどのような心的内容に迫りうるのか

竹内 謙彰<sup>i</sup>

本稿では児童期以降の発達アセスメントにおける内面理解のための方法として「三つの願い」質問を取り上げ、この質問が対象者のどのような心的内容に迫ろうとしたのかを先行研究を概観することで検討するとともに、大学生を対象として行った予備的調査研究の報告を行った。先行研究の概観により、「三つの願い」質問は児童精神医学の臨床においてはクライアントである子どもの内面理解のための技法として用いられていたこと、また、調査研究では心的内容理解のためにカテゴリー分類を通じた分析が行われていたことが明らかになった。予備的調査研究においては、質問紙が大学生に提示され、得られた応答のカテゴリー分類を行い、カテゴリーの一定の有用性が確認された。しかし、得られたカテゴリーと価値観質問紙との関連はほとんど見出されなかった。先行研究の概観と予備的調査研究の結果をふまえて、児童期の発達の特徴と関連付けて、子どもの心的内容に迫る上での「三つの願い」質問の持つ可能性についての考察がなされた。

キーワード：三つの願い、内面理解、人格発達、児童期、大学生、発達アセスメント

## はじめに

私たちの研究グループでは、幼児期の発達アセスメントのための指標の開発に取り組み、一定の成果をあげてきた (Nguyen, Tran, Dinh, Dao, Araki, Takeuchi, Tomii, and Matsumoto, 2015; 竹内・荒木・中村・荒井・松島・松元・富井・井上, 2014; 富井・荒木・竹内・中村・松島・荒井・松元, 2016)。次の課題として、現在、児童期の発達にかかわる指標の開発に取り組みつつあり、児童期の発達の特徴を改めて整理するとともに、従来の発達検査や知能検査の項目分析を行うことを計画している。本稿もそうした児童期の発達アセスメントのための指標の開発の一環に位置づけられる。通常、児童期の発達指標の開発では、認識発達が中心となるが、それと

は別に、子どもの人格や内面に迫る指標についての検討も課題となる。人格や内面に迫る指標の開発には様々なアプローチがありうるが、ここでは、いわゆる「三つの願い」質問を取り上げることにした。

児童・青年を対象とした臨床場面で用いられることのある「三つの願い」についての質問は、元来は児童精神医学の現場において子どもの抱える様々な問題を探り出す投影法として導入されたものである (Kanner, 1972)。米国ならびに英国においては、数は多くないものの実証的な学術論文が公刊されており、日本においてもいくつかの調査研究がなされてきたものの、近年ではそうした実証的研究も公表されていないようである。しかし、実施が簡便で内面が表現されやすい「三つの願い」について、一定の実証的検討を加える価値は、今日においてもあるのではないかと考えられる。今後、幾つかの側面から検討を加えていきたい。

ここでは、「三つの願い」を扱った先行研究を概観

i 立命館大学産業社会学部教授

し、この質問によってどのような心的内容に接近できるのかを整理するとともに、筆者が行った大学生を対象とする予備的調査研究についての報告を行う。

## 1. 先行研究概観

Google Scholarで“three wishes”をキーワードとして検索すると、10件のヒットがあり(2017年8月5日時点)、その中で最も古いものは、1938年に書かれた調査研究の論文であった(Wilson, 1938)。このことから、「三つの願い」の質問を、子どもを含む人の心的内容を探るために用いた研究は、少なくとも1930年代までさかのぼることができるようだ。また、自閉症に関する最初の学術報告を行った児童精神科医のKannerは、臨床場面で用いることができる投影法のひとつとして、「三つの願い」を取り上げている(Kanner, 1972)。さらに、日本における調査研究を調べるために、同じくGoogle Scholarで「三つの願い」をキーワードとして検索すると、120あまりのヒットが得られた。そのうち、「三つの願い」質問を用いた調査研究は、あまり多くはないが、その中では、いくつかの実証研究を見出すことができた。

本節では、見出された先行研究について、(1)対象者のどのような心的特徴を明らかにすることを企図して「三つの願い」質問が用いられたのか、ならびに、(2)「三つの願い」質問の応答がどのようなカテゴリーを用いて分析されたのか、という二つの点から整理を試みたい。

### 1-1. 「三つの願い」質問によって対象者のどのような心的特徴を明らかにしようとしたのか

#### 1-1-1. Kannerによって用いられた臨床場面での「三つの願い」の質問

Kanner (1972) は、その著書 Child Psychiatry<sup>1)</sup>の中の第16章を子どもに対して用いることができるいくつかの投射法(投影法)の解説に当てており、その中のひとつの節で、「三つの願い」(邦訳書では、

「三つの願いごと」というタイトルとなっている)を取り上げている。

そこでKannerは「三つの願い」の質問の仕方について、以下のように述べている。

子供との打ちとけた(人間)関係が成立したら、なるべくその子供の好きな話しと関連させて、お話を信じるかどうか訊ねてみる。でなかったら、どんな願いごとでもよいから三つだけかなえてあげるという妖精がいると考えてみよう。そうしたら君の三つの頼みごとはどんなものだろうときいてみるのがよい。(邦訳書 pp.185-186)。

では、この質問を通じて、Kannerは何を明らかにしようとしたのだろうか。それを知るためには、彼が報告している事例に着目してみるのがよいだろう。「三つの願いごと」の節では、7歳から12歳までの5人の子どもの事例が報告されている。どのように「三つの願い」が臨床場面で用いられるかを具体的に理解する助けになると考えられるので、やや長くなるが、ひとつの事例を下記に引用しておきたい。

完全癖をもつ母親のご機嫌を伺い、極端に高い要求水準を持ち続けている11歳になるSandra, Z.は最初の面接のときから、緊張し、礼儀正しくしすぎてなんらの意見さえのべ得なかった。家庭の状況についても、両親はよい人であるというようなことを形式的に話すほか、何もいおうとしなかった。「三つの願い」をいってごらんといわれた時、彼女は非常に考えこんでしまったが、次のように答えた。一つ「よい看護婦になりたい」(彼女のそのときの職業的野心)二つ、「神様に対して悪いことをしたり、過ちを犯したりしたくない」三つ、(長い時間をおいた後)「幸せになりたい」こういい終わってから、やっと彼女は「くつろぐ」ことができた。そして彼女は他の人々を楽しくしてあげたいと熱意をこめて話した。彼女はよくできる生徒であった。ピアノの独奏が上手で、日曜学校は皆出席が記録され、姉が戸外

で楽しく遊んでいるときでも家で母親の手助けをしていた。彼女の三番目の願いは、「善良さ」ということと幸福とが同義語ではないことを彼女自身に認識させたに違いない。彼女は姉が善良かどうかについては考えないけれども、姉が幸せであることに対して嫉妬を抱いていたのである。彼女の母親との関係に比べて、彼女と姉とのあり方はこれでよいか、という疑いをもち始めたのである。こうして積極的な心理療法への扉が広く開かれた。（邦訳書 p.186）

この事例を含めて5人のどの事例でも共通しているのは、「三つの願い」の質問が、子ども自身も気づいていない、隠された（あるいは抑圧された）願望を引き出すためのいわば手がかりとして機能している点である<sup>2)</sup>。臨床医であった Kanner にとっては、「三つの願い」質問は、家族関係や家族の置かれている状況等をふまえた上で、クライアント自身への洞察を得るための、いわば探り針であったとあってよいだろう。なお、この質問に答えるプロセスの中で、クライアント自身に「気づき」が生じるという記述も見られており、心的内容を探るための技法の域を超えて、心理療法への導入の意味合いをも持ちうるものと捉えられていたようである。

### 1-1-2. 子どもの人格・内面理解の方法としての「三つの願い」

Kanner は「三つの願い」について子どもを対象とする臨床場面での投影技法としてとらえていたのに対して、田中・田中（1968）は、子どもにおける発達の水準を理解するための指標となりうることを指摘した。すなわち、ある発達の段階では、答が食べ物に集中し、次の段階ではおもちゃに発展し、さらにお金などへと発展する姿を指摘している。

こうした観点をさらに発展させて、金田（1978, 1979, 1980）は、「三つの願い」質問が、子どもの人格や内面を理解する指標となりうるのではないかと提起している。すなわち、金田（1979）は「三つの願い」質問が、臨床心理学の投影法と生活教育実践

の中で創造された生活表現教育という2つの異なるアプローチの接点となる可能性を示唆しているのである。そして、子どもの内面を読み取るためには、発達の水準と反応の個人的性向および内面の内容的側面の3点から捉えることが求められると指摘している。金田（1979）の調査結果では、子どもの内面に学校生活、家庭生活が大きくくいこんでいること、高学年になるにつれて社会的な問題にも目を向けるようになること、また、自分自身への関心は小学校高学年で一段と大きくなること、などの特徴が見出されている。

面接法や質問紙法によって、対象者に「三つの願い」の質問を行って対象者の心的内容をさぐる場合、得られた反応をどのように分析するかが研究方法上の焦点となる。多くの調査研究が、得られた応答を何らかの形でカテゴリーに集約した分析を行っているため、以下では先行研究において、どのようなカテゴリー分類がなされているかを概観しておきたい。

### 1-2. 「三つの願い」質問に対する応答のカテゴリー分類

「三つの願い」質問への応答から心的内容を探るための重要なアプローチとして、応答内容をカテゴリー分類する分析方法が多くの研究で採用されている。

実は、前節で紹介した Kanner（1972）も、少数の臨床例に対して、カテゴリー分類を試みている。彼は紹介した5事例を、①緊張しているためにだれでも欲しがらるものと言うなどの紋切り型の反応をする、②一人になることを好んでいることがわかる反応をする、③3つの質問への答の中に自分の葛藤を表現する、④特に目立つところのない応答に深い意味が隠されている、という4つのカテゴリーに分けて記述している。これらのカテゴリーは、クライアントの示す特徴を示した興味深いものではあるものの、あくまで臨床現場においてみられる特徴的な反応を記述するために用いられたカテゴリーであり、一般

化することに適したもとは言えないだろう。

Wilson (1938) は、先述したように、Google Scholar で “three wishes” をキーワードとして検索した際にヒットした中では、「三つの願い」に関する学術誌に掲載されたもっとも古い実証的研究である。彼は、様々な年齢群の子どもたち（その中には Jersild, Mackey and Jersild (1933)<sup>3)</sup> が行った調査データも含まれている）ならびに女子大学生の「三つの願い」に対する応答を21のカテゴリーに分類し、そのカテゴリーの信頼性や妥当性について検討している。ちなみに、彼が分析に用いたカテゴリーは、Jersild et al. (1933) が提案したものをういている。

女子大学生の4つの下位グループにおいて、21のカテゴリーの出現頻度を比較し、下位グループ間で大きな差はみられないことから、分類に用いられた21のカテゴリーには一定の信頼性と妥当性があると Wilson (1938) は主張している。これら21のカテゴリーを下記に列記しておく。

(1) Specific objects, (2) Money, (3) Good living quarters, (4) Activity, sports, diversions, (5) Opportunities and accomplishments, (6) Vocation, (7) Be bright and smart, (8) Moral self-improvement, (9) Improved personal appearance, (10) Prestige, adventure, (11) Supernatural power, (12) Baby, sibling, (13) Marriage, (14) Parents never die, (15) Companionship, (16) Relief from irritation, (17) Specific benefits to parents and relatives, (18) General benefits for self, (19) General immunities for self, (20) General benefits for relatives, (21) General benefits for others, Philanthropies.

Wilson (1938) はまた、女子大学生群と5-6歳および11-12歳の子ども群との比較も行っており、顕著な違いとして、①5-6歳児では「特定の物をもつこと ((1) Specific objects)」が55%と際立って多く、11-12歳でも14%であるのに対して、大学生では1.6%と少なくなること、また、②「職業 ((6) Vocation)」、 「お金 ((2) Money)」、 「活動、スポー

ツ、娯楽 ((4) Activity, sports, diversions)」、 「自分にとっての一般的な利益 ((18) General benefits for self)」の4カテゴリーは、大学生のほうがふたつの子ども群よりも選択の割合が明らかに多かったことを指摘している。また Wilson (1938) は、21のカテゴリーを5つの上位カテゴリーに集約した分析も行っており、利他的 (Altruistic) 願望の大カテゴリーの選択比率は、11-12歳群で最も多く (28%)、大学生群 (13.6%)、5-6歳群 (8%) の順に少なくなる、という興味深い結果が得られている。

なお、Wilson (1938) は、大学生の願望を分析した結論として、「三つの願い」質問には、フロイト派が主張するような抑圧された願望が反映するというよりは、個人が持っている欲求がダイレクトに反映されやすいと考察している点を付記しておきたい。

Winkley (1982) は、10~11歳の、一般の子どもたち (以下、一般児群) ならびに精神科医の診察を受けている子どもたち (以下、臨床児群) を対象として、比較的わかりやすいカテゴリー分類を用いた調査研究を行っている。その主要カテゴリーは、「所有物 (possessions)」、 「社会正義 (Social conscience or concern)」、 「将来 (Achievement for future)」、 「個人要求 (Personal need)」、 「環境変化 (Change in home/school)」、 「旅行 (Travel)」、 「恐怖回避 (Removal of fears)」、 「その他 (Unclassified)」の8つであり、各カテゴリーのもとにさらに小カテゴリーが配されていた。一般児群と臨床児群の比較では、臨床児群に「個人要求」の中でも「現実の問題」への言及が多いことが見出された。こうした結果から Winkley (1982) は、特に臨床児群においては、子ども自身の抱える不安や懸念が、この「三つの願い」質問に反映されやすいと考察している。また、一般児群の中の男女の比較では、男児に非現実的な願望が多いのに対して女児には現実的な願望が多いことなどの傾向が認められた。

日本においても、Winkley (1982) の用いたカテゴリーを適用して、「三つの願い」質問に対する対象児・者の応答を分析した清水らの一連の研究があ

る（清水里美・清水寛之・千野，1993；清水寛之・清水里美・千野，1993；清水里美・清水寛之・千野，1994；清水寛之・清水里美・千野，1994；清水寛之・清水里美・千野，1995；清水寛之・清水里美・千野，1996）。彼らは、中学生，女子短大生，大学生，高齢者といった対象者に対して「三つの願い」質問を実施し，その応答がいずれの群においても Winkley（1982）のカテゴリーを適用することができたことを報告している。また，中学生及び女子短大生の応答に対しては，数量化Ⅲ類による分析を行っており，中学生を学年ごとで分析した結果と女子短大生との結果を対比し，中学3年生と女子短大生において，カテゴリー間の関連が類似していることを見出している。

Chiu and Nevius（1990）は，12～14歳の中学生を対象に「三つの願い」質問を実施し，優秀児と一般児（gifted and non-gifted）の比較ならびに男女の比較等の分析を行っている。ちなみに，ここで優秀（gifted）とされる条件には，通常の学年より1学年以上進んでいる，学業成績が通常の学年より2学年以上のレベルにある，創造的な思考ができる，知能検査成績に優れている，リーダーシップを発揮する，芸術的スキルに秀でているという条件のうち，少なくとも二つ以上に該当したものとなっている。彼らが優秀児と一般児の比較を行った一つの理由は，知的に優れているほど向社会性が高いとする予測を検討することであった。「三つの願い」質問への応答を分析するのに用いられたカテゴリーは，①物質的願望（Materialistic Wishes），②利他的願望（Altruistic Wishes），③個人的願望（Personal Wishes），④達成的願望（Goal Wishes）の4つであった。分析の結果，優秀児群で最も頻度が高いのは一般児と同じく個人的願望であるものの，優秀児は一般児と比較して，向社会性の指標と考えられる利他的願望が多く，また達成的願望が少ないことが明らかになった。また，男女の比較では，両群に共通して男子の方が女子より，物質的願望が多く見られた。

Dykens, Schwenk, Maxwell and Myatt（2007）は，5～55歳の知的障害者を対象として，「文章完成法」ならびに「三つの願い」質問を対象者に個別に実施し分析を行っている。彼らが，これら二つの課題を知的障害者に適用した理由は，こうした半投影法的な技法が知的障害者の自己知覚を探るうえでふさわしいものと考えられたからであった。あわせて，対象者には知能検査（Kaufman Brief Intelligence Test; K-BIT）が実施されるとともに，保護者に対して適応行動に関するチェックリスト（Child Behavior Checklist; CBCL）への記入が求められた。「文章完成法」と「三つの願い」の内容分析に当たっては19種類のコード（Academic, Activities, Dating/romance, Family, Food, Friends, Help others, Idiosyncratic, Money, Music, Negative self, Negative physical, Objects, Occupation, Pets, Positive self, Positive physical, Sports, Travel）が適用された。「三つの願い」で頻出したコードを多い順に5位まであげると，活動（Activities），欲しいもの（Objects），家族との関係（Family），お金（Money），ペットとの関係（Pets）であった。このうち，活動と家族との関係は，「文章完成法」でも上位5位以内に入っていた。性やIQによる違いは見出されなかった。CBCLと有意な相関がみられた「三つの願い」のカテゴリーは，否定的な自己（Negative self）のみであった（負の相関）。そもそも「願い」を問われているにもかかわらず，否定的な自己認識（例では，「悪い子になりたい」などがあげられている）を表明すること自体，社会的適応の点で懸念されるところである。

日本でも，久保（2007）が知的障害者を対象に「三つの願い」質問を行い，カテゴリー分類を行っている。久保は，18歳から80歳代までの知的障害者37名に対して，労働と生活認識に関する様々な質問を行っているが，その中に「三つの願い」質問が含まれていた。分析にあたって，対象者を，田中（1980）の「可逆操作の高次化における階層－段階理論」に基づき，2次元形成期，2次元可逆操作移

時期、2次元可逆操作期の3つに発達水準に区分した群を構成して比較検討を行っている。ここで言う2次元可逆操作期は、通常の発達では4歳ないし4歳半頃に到達するとされる発達の段階である。「三つの願い」質問への応答は、「こうなりたい自分」、「友達といたい」、「仕事」、「好きなこと」、「行きたい所」、「欲しいもの」、「食べたいもの」、「ない」、「答えなし」の9カテゴリーに分けられた。2次元可逆操作期群に特徴的なカテゴリーは、「こうなりたい自分」と「仕事」であり、それぞれ20%程度みられるが、他の二つの群では、ほとんど、あるいはまったくみられない。それに対し、「食べたいもの」は2次元可逆操作期群ではみられないが他の2群では10~20%程度みられるカテゴリーであった。これは、発達の水準が願望に反映されるとする田中・田中(1968)の指摘に合致する結果と言えらる。

日本における大学生を対象とした研究として、久津内・中川・森田・荒木(1991)も紹介しておきたい。彼らの報告は学生実態調査であり、多様な質問項目が用いられているが、その中に「三つの願い」質問に類似した設問がある。ただし、通常の「三つの願い」とは異なり、予備調査によってあらかじめ設定された選択肢から自分の願望にもっともよくあてはまるものと2番目によくあてはまるものを順序付けて選ぶ、選択肢形式の設問となっている。選択肢として設定されたカテゴリーは、「透明人間、世界平和、就職、性格を変えたい、子どものころにもどりたい、家族の病気をなおしたい、好きな人との結婚、超能力、あらゆる外国語、時間が欲しい、自然の中での生活、核兵器廃絶、金持ち、楽しい家庭、外国旅行、不老不死、有名になりたい、その他」の18項目であった。第1選択と第2選択をあわせて選択者の多い順に上位5位までをあげると、第1位「金持ち」、第2位「時間が欲しい」、第3位「超能力」、第4位「好きな人との結婚」、第5位「あらゆる外国語」であった。また、選択率が低かった項目は、「世界平和」、「性格を変えたい」、「自然の中での生活」、「子どもの頃にもどりたい」であった。

## 2. 予備的調査研究

### 2-1. 目的

既述のように、実施が簡便で内面が表現されやすいと考えられる「三つの願い」質問について、一定の実証的検討を加える価値があるのではないかと考えられる。

今回は、そのための予備的調査研究として、大学生における「三つの願い」質問への応答に対しカテゴリー(Winkley, 1982)に基づく分析を行い、それと価値観(酒井・久野, 1997)との関連についての報告を行う。大学生の表現する願望が何らかの価値観を反映しているのかどうかの検討を行うことが、今回の予備的調査研究の目的である。

### 2-2. 方法

#### 対象者

大学生132名(女子74名, 男子38名, 不明・無記名20名)。

#### 測度

(1) 三つの願い: 「もし、どのようなことでも願い事が三つまでかなえられるとしたら、あなたはどのようなことを願いますか」と教示し、その願いとそれを選んだ理由を質問紙に記入することを求めた。

(2) 価値志向質問紙: 酒井・久野(1997)が作成した価値志向的精神作用尺度の下位尺度から「理論」、「社会」、「権力」、「美」の4つの下位尺度を取り上げ、それぞれに位置づけられる4つの質問項目、計16項目からなる価値志向質問紙を構成し(項目内容はTable 1を参照)、5件法で回答を求めた。

### 2-3. 結果と考察

#### 価値志向質問紙の因子分析結果

記入の不備があったものを除き128名を対象として最尤子法、クオーティマックス回転による因子分析を行った。当初の仮定にもっとも適合していたため、4因子解を採用した(Table 1)。

Table 1 価値志向質問紙による調査の因子分析結果

回転後の因子行列

	因子			
	1	2	3	4
1. 何か変わったことに気づくと、その原因や理由をつきとめたくなる。	.467	.264	.023	.209
2. 相手の話を良く聞いて、気持ちを受けとめようとする方だ。	.052	.537	.006	-.083
3. 他人に対して、自分の意見をはっきり言う方だ。	.048	-.147	.229	.750
4. きれいなものを集めたり飾ったりすることが好きだ。	.261	.100	.446	.162
5. ものの仕組みがどうなっているのか、興味をもつ方だ。	.752	.050	.154	.002
6. 誰かが困っているのを見たら、すすんで手助けする。	.220	.682	-.150	.179
7. グループの中心になって、他の人を引っばっていきこうとする方だ。	.147	.048	-.100	.533
8. 自分がふだん使うものは、色やデザインにこだわる方だ。	.031	.059	.455	.013
9. 「これは何だろう」「なぜこうなるのだろう」という疑問をもつ。	.569	.155	.246	.208
10. 家族や友人に対する愛情が深い方だ。	-.010	.620	.209	.051
11. まちがったことをしている人を見たら、きちんと注意する。	-.014	.244	.250	.359
12. 身のまわりの物の形や色に、強く心を引き付けられることがある。	.241	-.016	.733	-.023
13. 複雑なものの中から、法則やパターンを見つけ出すのが好きだ。	.586	.039	.250	.039
14. 人の生き方を見て、「えらいなあ」「すてきななあ」と感心することが多い。	.126	.454	.202	-.015
15. 自分が正しいと思うことなら、反対する人を説得してもやり通す。	.164	.034	.232	.335
16. 音楽が好きの方だ。	.101	.094	.260	.158

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiserの正規化を伴うクォーティマックス法

因子負荷量0.3以上を基準として各因子に相対的に負荷の高かった各4項目を、各因子を代表するものとみなした。項目16は、負荷量が0.3を超える因子がなかったが、相対的に第3因子にもっとも負荷が高かったので、第3因子を代表する項目とした。第1因子は「理論」、第2因子は「社会」、第3因子は「美」、第4因子は「権力」にそれぞれ相当すると考えられた。

各因子を代表する項目の得点を加算して項目数で除し、下位尺度得点とした（Table 2）。

### 「三つの願い」の категория分類と数量化Ⅲ類による分析

清水ら（1994）が用いたWinkley（1982）の基準に従い、対象者の第1から第3までの反応（願い）

Table 2 価値志向の下位尺度得点の平均と標準偏差

	理論	社会	美	権力
平均値	3.48	4.11	3.00	3.77
標準偏差	0.76	0.53	0.72	0.73

を、「所有物」、「社会正義」、「将来」、「個人要求」、「環境変化」、「旅行」、「恐怖回避」、「その他」、「反応なし」の9カテゴリーに分類した。各対象者に少なくとも一つの反応が該当するカテゴリーには1を付与し、それ以外のカテゴリーは0を付与した。このデータを数量化Ⅲ類により分析した。ただし、三つの願いを一つも記入しなかった対象者を分析から除外するとともに、「その他」と「反応なし」を分析対象の変数から除いた（ $n=115$ ）。

抽出された3つの軸のそれぞれについて、カテゴリースコアを示した（Fig. 1）。1軸は「公的-私的」、2軸は「楽しみ-不安」、3軸は「変化-維持」を表現していると解釈された。

### 「三つの願い」と価値志向性の関連の分析

「三つの願い」の各軸におけるサンプルスコアと価値志向性得点とのピアソンの相関係数をTable 3に示した。3軸と「社会」の間にはのみ有意な関連がみられた。「社会」は身近な人との関係を大切にすることを志向する価値であり、3軸との間が負の相

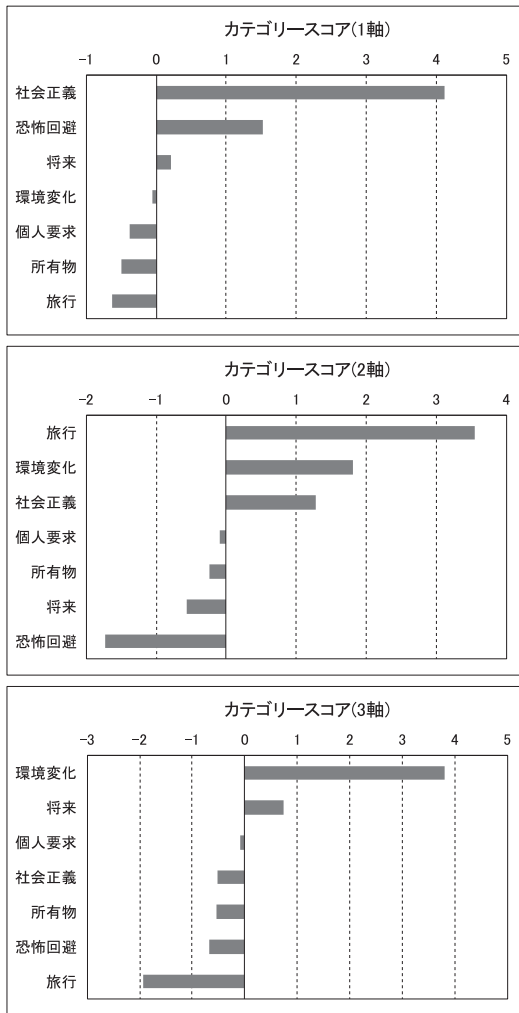


Fig. 1 数量化Ⅲ類で見出された各軸におけるカテゴリースコア

関であったことは、関係性の維持と関わっているものと解釈された。

次いで、「三つの願い」の各カテゴリーが0か1かで対象者を群分けし、両群間の価値志向性得点の平均値の差の検定を行ったところ、「恐怖回避」で0の方が1より「権力」の得点が高い有意であった ( $t=2.26$ ,  $df=110$ ,  $p<.05$ )。

また、「所有物」で0の方が「理論」得点で ( $t=-1.38$ ,  $df=110$ ,  $p<.10$ )、「個人要求」で1の方が「社会」得点で ( $t=-1.85$ ,  $df=110$ ,  $p<.10$ )、「環境

Table 3 3つの軸のサンプルスコアと価値志向性得点の相関

	理論	社会	美	権力
1軸	.083	.080	.024	.013
2軸	-.028	-.060	.001	.143
3軸	.015	-.193*	.053	.026

\* 相関係数は5%水準で有意 (両側)。N=112

変化」で0の方が「社会」得点で ( $t=1.97$ ,  $df=110$ ,  $p<.10$ )、有意に高い傾向がみられた。

#### 2-4. まとめ

「三つの願い」質問の応答のカテゴリー分類に基づく数量化Ⅲ類による分析結果から、清水ら (1993-1996) と同様の3つの軸が見出された。ここで見出された3つの軸は、「三つの願い」質問の応答によって構成される大きなカテゴリーとしてある程度一般化されうるものかもしれない。

「三つの願い」質問は、個人の価値観を反映しているのではないかと予測に基づき、その応答カテゴリーと価値志向との間の関連を見たが、あまり明瞭な関連は見出されなかった。その中では、価値志向質問紙の「社会」得点と、「三つの願い」の3軸 (変化-維持の軸) との間に有意な負の相関が見出されたことには注目される。価値志向質問紙の「社会」因子は、向社会的性を代表するような指標であり、それと「三つの願い」で見出された身近な関係を維持しようとする傾向との間に関係があると解釈できるかもしれない。

### 3. 総合考察と今後の課題

先行研究を概観することで、「三つの願い」質問が、児童精神医学の臨床場面では、Kanner (1972) によって児童期の子どもを対象として適用されたが、他方で様々な年齢層・発達段階にある対象者に実施されてきたことが明らかになった。

まず、児童期の子どもに適用された点について、



検討しておきたい。Kannerが児童期の子どもに対して「三つの願い」質問を行ったのは、何よりも彼のクライアントの多くが子どもだったからである。とはいえ、彼がChild Psychiatryの中で言及している投射法（投影法）の中で、言葉を媒介にして子どもの内面に直接迫ろうとする方法は、「三つの願い」だけであるといつてよい。他の技法は、言葉以外の表現方法を用いるもの（遊び、描画、模型作り、指絵、劇による表現）、あるいは、クライアント自身が経験した過去の空想的産物（夢、白昼夢、想像上の仲間）に基づいたものである。言葉によって、子どもの内面に迫りうる方法として、経験的に「三つの願い」質問が採用されたのかもしれない。

児童期後半の子どもを対象としたWinkley (1982)は、10-11歳の子どもを対象とした理由について、以下のように述べている。すなわち、10歳過ぎ頃では、比較的自由に自分の願望を表現してくれること、また調査における実際的な理由としても、10歳頃になれば文章を書くことができるため、質問紙による調査も可能になってくることをあげているのである。

児童期のなかば頃以降の発達的特徴について、中村 (2004) は、ヴィゴツキーの最近接発達領域と内言にかかわる考え方をもとに、意識における自覚性と随意性が新たに形成されることを指摘している。自覚性と随意性は、学校教育の中での科学的概念の獲得過程を通じて形成されるものであるが、これらはまた、単に概念に対する自覚と自由な支配（随意性）にとどまるものではなく、子ども自身の心理過程にも及ぶものだと考えられる。つまり、児童期のなかば以降、子どもは自らの心理過程をある程度対象化できるようになり、また、思考の方向づけも可能になり始めるのである。そして自らの心理過程の客観化は、書き言葉の獲得を通じてさらに進展するものである。こうした発達の特徴をふまえれば、言葉を介した内面の探求は、まさに児童期以降、本格的に課題になるといってよいだろう（竹内, 2009; 2010）。

とはいえ、幼児期に相当する発達段階にある対象

者に「三つの願い」質問を実施した研究も見られる（Dykens, 2007; 久保, 2007）。彼らの研究は、いずれも知的障害者を対象としているので、発達年齢が幼児期に相当するとしても、定型発達の幼児と同一視することはできない。むしろ、生活経験が長いだけに、経験が願望に豊かに反映するという可能性があると考えられる。とはいえ、認識能力のレベルで幼児期に相当するのであれば、言葉による表現には制約が伴うことは否めない。それだけに、対象者がおかれている環境条件など様々な要因と重ねあわせることで、「三つの願い」質問の応答を丁寧に読み取ることが求められる。

翻って、児童期以降に言葉を介して対象児・者の内面への探索をやり多いものにするためには、話し言葉であれ書き言葉であれ、豊かな語りを引き出すことが重要となつてこよう。しかしそうだとすると、児童期以降における、言葉を介した内面の探索の指標として、「三つの願い」質問以外にも、活用しうる指標の候補をあげることができるだろう。たとえば「二十答法」や「文章完成法」などである。これらは、対話を通じても実施できるが、書き言葉による応答も可能である。特に児童期のなかば以降であれば、Winkley (1982) も指摘するように、文章を書くことで応答を求めることもできるようになる。さらに、文章を書くことができるということをふまえれば、子どもの内面を探るために、作文を書いてもらってその内容を分析するというアプローチもありうるだろう。

ここでは、言葉を介して内面にアプローチする様々な方法について詳細に検討する余裕も準備もないので、その点は別の機会に譲りたい。とはいえ、「三つの願い」質問の他の技法との違いについては触れておくべきだろう。一つの特徴として、「三つの願い」質問は、口頭による対話形式であれ書字による記述形式であれ、「二十答法」や「文章完成法」、あるいは「作文」などと比べて実施が簡便な点が指摘できる。この点は、認識能力の発達を捉えるためのアセスメントと合わせて実施することを想

定する場合には、対象者の負担を軽減しなければならないだけに、重要である。もう一つの特徴は、「三つの願い」質問が、個人の内面のうちでも、特に願望に焦点を当てている点である。それに対して「二十答法」は“Who am I” test と呼ばれるように自己に焦点を当てた技法であり、「文章完成法」は様々な刺激文を用意することで個人の様々な側面に光を当てようとするものであるなど、それぞれの指標で焦点を当てるところが異なっている。それゆえ、実際に用いる際には、何がこの指標を通じて明らかにできるのか、その優れた点と限界とを踏まえておくことが求められる。

なお、今回の予備的調査研究では、「三つの願い」の分析で析出されたカテゴリーや数量化Ⅲ類の分析による軸と質問紙で捉えた価値観との間には、あまり明瞭な関係が見出されなかった。このことは、対象となった大学生において、その価値意識が、「三つの願い」質問への応答にダイレクトには反映されるものではないことを示唆している。

そもそも「願い」や「願望」と訳される“wish”の語は、精神分析理論に由来する概念を表していたものである。『APA 心理学大辞典』(VandenBos, 2007)によれば、願望(wish)は、「精神分析理論の用語。意識レベル、および、無意識レベルで作動する生物学的本能の心理的現れ。」である。また、同辞典には関連する語彙として、「願望成就(wish-fulfillment)」が掲載されている。その意味は「精神分析理論の用語。生物学的本能と関連する願望を、空想や夢の中で充足させること。」とのことである。Kannerは、おそらく上述したような意味で、three wishesを捉えていただろうし、また、子ども向けの投射法(投影法)として、「三つの願いごと」となるんで「夢」や「白昼夢」を取り上げているのも、精神分析理論の文脈に適合していると考えられる。しかし、Wilson(1938)の考察にも見られたように、多くの調査研究は必ずしも精神分析理論をふまえているわけではなく、むしろ心の内面にある一般的な願望や欲求にアプローチする手段として、「三つの

願い」質問を用いているとあってよいだろう。本研究においても、「願い」の語を、より一般化した、顕在的あるいは潜在的な望みあるいは欲求と捉えている。そうした「願い」は、顕在化して意識されるようになれば、価値意識による吟味がなされることで、価値観との関連性が生じてくる可能性があるものの、潜在的な状態、あるいは少なくとも十分意識的な吟味が行われない状態であるならば、価値観との交差は生じえないであろう。今回の予備調査結果は、「願い」と「価値観」の源泉が異なるものであることを示唆している。

「三つの願い」質問によって明らかになるものが顕在的あるいは潜在的な望み・欲求であるとする、それがどのようなものであるかができるだけ浮き彫りになるよう、豊かな記述が引き出せるようにしなくてはならない。ともあれ、うまく子どもの内面の特徴を拾い出すことができるのであれば、「三つの願い」を子どもの心的内容を掘り下げための道具として、今後も使うことができる。しかしそのためには、分析の視点と技法の洗練をはかることが必要である。すなわち、児童期の子どもを対象として、より適切な分析のためのカテゴリー抽出を行うことが求められるのではないだろうか。今後の課題としたい。

## 付記

本研究は、2016年度産業社会学会の研究助成を受けて実施された。なお、本稿で紹介した「予備的調査研究」は、2017年3月に開催された日本発達心理学会第28回総会のポスターセッションにおける発表(竹内, 2017)を元に作成したものである。

## 注

- 1) 本論文で引用しているKannerの著書Child Psychiatryは、第4版の日本語訳である。
- 2) 実は、願望の抑圧をもたらしているのがクライアントである子どもの親であるという点が、5人の事例のもう一つの共通点として指摘できる。実際にKannerが診察した事例にはこうした例が多

かったのかもしれないが、当時隆盛であった精神分析的な見方が反映している可能性があるろう (Silberman, 2015)。とはいえ、検討の対象となった事例の子どもたちが、7～12歳の児童期に当たっており、発達的には親からの精神的な自立が課題になりはじめるがゆえに、親の期待がそれを妨害する要因となったという見方もできるかもしれない。

3) この文献については未見。

### 引用文献

- Chiu, J-P. P., & Nevius, J. R. (1990). Three wishes of gifted and nongifted adolescents. *The Journal of Genetic Psychology*, 151(2), 133-138.
- Dykens, E., Schwenk, K., & Myatt, B. (2007). The sentence completion and three wishes tasks: windows into the inner lives of people with intellectual disabilities. *Journal of Intellectual Disability Research*, 51(8), 588-597.
- Jersild, A. T., Markey, F. V., & Jersild, C. L. (1933). Children's fears, dreams, wishes, daydreams, likes, dislikes, pleasant and unpleasant memories. *Child Development Monographs*, 12.
- 金田利子. (1978). 子どもの人格・内面理解の理論と方法—ひらかれた問い（臨床検査）と生活つづり方教育の接点から—. 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 100-101.
- 金田利子. (1980). 子どもの人格・内面理解の理論と方法（Ⅱ）—人格・内面に関する実態調査の試みから—. 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 176-177.
- 金田利子. (1980). 子どもの人格・内面理解の理論と方法（Ⅲ）—子どもの学校観、家庭観、社会観把握のころみから—. 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 412-413.
- Kanner, L. (1972). *Child Psychiatry: Fourth edition*. Springfield, Illinois: Charles C Thomas Publisher. (黒丸正四郎・牧田清志（訳）. (1974). カナー児童精神医学 第4版. 東京：医学書院.)
- 久保容子. (2007). 発達年齢3, 4歳頃の成人期知的障害者における労働と生活認識について. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 10, 29-41.
- 久津内一雄・中川順子・森田浩平・荒木穂積. (1991). 現代学生の実態と意識—1990年度立命館大学産業社会学部学生実態調査報告—. 立命館大学産業社会学論集, 27(2), 117-192.
- 中村和夫. (2004). ヴィゴツキー心理学 完全読本. 新読書社.
- Nguyen, T. H. Y., Tran, T. M. T., Dinh, N. T. T., Dao, T. B. T., Araki, H., Takeuchi, Y., Tomii, N., & Matsumoto, Yu. (2015). A new approach for assessment of child development in Vietnam: Developing tools as developmental checklist for children. 立命館産業社会学論集, 51(1), 55-66.
- Silberman, S. (2015). *Neuro Tribes: The Legacy of Autism and the Future of Neurodiversity*. New York: Penguin. (正高信男・入口真夕子（訳）. (2017). 自閉症の世界：多様性に満ちた内面の真実. 講談社)
- 清水里美・清水寛之・千野美和子. (1993). 「三つの願い」に関する発達的研究Ⅰ—公立中学校に在籍する児童の反応—. 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 93.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子. (1993). 「三つの願い」に関する発達的研究Ⅱ—数量化Ⅲ類による中学生の反応の分析—. 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 94.
- 清水里美・清水寛之・千野美和子. (1994). 「三つの願い」に関する発達的研究Ⅲ—女子短大生と女子中学生の反応の比較検討—. 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 175.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子. (1994). 「三つの願い」に関する発達的研究Ⅳ—数量化Ⅲ類による女子短大生の反応の分析—. 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 176.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子. (1995). 「三つの願い」に関する発達的研究Ⅴ—大学生の反応の特徴（1）—. 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 462.
- 清水寛之・清水里美・千野美和子. (1996). 「三つの願い」に関する発達的研究Ⅵ—高齢者の反応の特徴（1）—. 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 49.
- 竹内謙彰. (2009). 学童期における認知発達の特徴—

- 9, 10歳の発達の記事に焦点を当てて一. 立命館人間科学研究, 18, 77-86.
- 竹内謙彰. (2010). 高機能広汎性発達障害児のニーズ理解と9, 10歳の発達の節. 心理科学, 30(2), 11-22.
- 竹内謙彰. (2017). 「三つの願い」の意味するもの: 予備的調査研究—大学生における価値観との関連の検討—. 日本発達心理学会第28回大会発表論文集, P1-2.
- 竹内謙彰・荒木穂積・中村隆一・荒井庸子・松島明日香・松元佑・富井奈菜実・井上洋平. (2014). 新しい発達診断法開発の試み—幼児期における発達の時期ごとの分析的検討—. 立命館産業社会論集, 50(2), 121-131.
- 田中昌人. (1980). 人間発達の科学. 青木書店.
- 田中昌人・田中杉恵. (1968). 「精神薄弱児」研究の方法論的検討. 財団法人大本会・心身障害者福祉問題総合研究所.
- 富井奈菜実・荒木穂積・竹内謙彰・中村隆一・松島明日香・荒井庸子・松元佑. (2016). 新しい発達診断法開発の試み (2) —幼児期における発達の基本構造の検出—. 立命館産業社会論集, 52(1), 149-168.
- VandenBos, G. R. (2007). *APA dictionary of psychology*. American Psychological Association. (繁榊算男・四本裕子 (監訳). (2013). APA心理学大辞典. 倍風館.)
- Wilson, F. T. (1938). Verbally expressed wishes of children and college woman students. *The Journal of Psychology*, 5, 91-105.
- Winkley, L. (1982). The implications of children's wishes – Research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 23(4), 477-483.

## Research Note

### What Kind of Mental Contents Can “Three Wishes” Questions Approach?

TAKEUCHI Yoshiaki<sup>i</sup>

**Abstract** : The present article reviewed published literature using “three wishes” questions in order to examine what kind of mental contents they approached, and reported a preliminary study in which undergraduates participated. The review suggested that while child psychiatrists used “three wishes” questions as a technique to approach client children’s mental contents at their clinic, in several researches, responses to “three wishes” questions were analyzed using category classification in several surveys. In preliminary study, usefulness of the categories was acknowledged because responses to “three wishes” questions could be classified into nine categories based on Winkley (1982). However, very few relationships between categories and values assessed by questionnaire were found. Considering the review and preliminary study results in relation to developmental features of childhood, the potential of using “three wishes” questions for approaching children’s mental contents was discussed.

**Keywords** : three wishes, understanding mental contents, personality development, childhood, undergraduates, developmental assessment

---

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University